

中小規模家族経営が搾乳ロボットを導入して省力化、規模拡大

(北海道)

・TMRセンターを活用した飼料生産の分業化と、搾乳ロボット(2台)を活用した省力化により、夫婦2人(雇用労働無し)のみで、150頭の搾乳を実現。

・地域の農協は、今回のケースをモデル的に活用して、TMRセンターによる分業化、機械化を更に推進。

現状と課題

担い手・労働力の不足



新たな取組

搾乳作業を省力化し、規模拡大

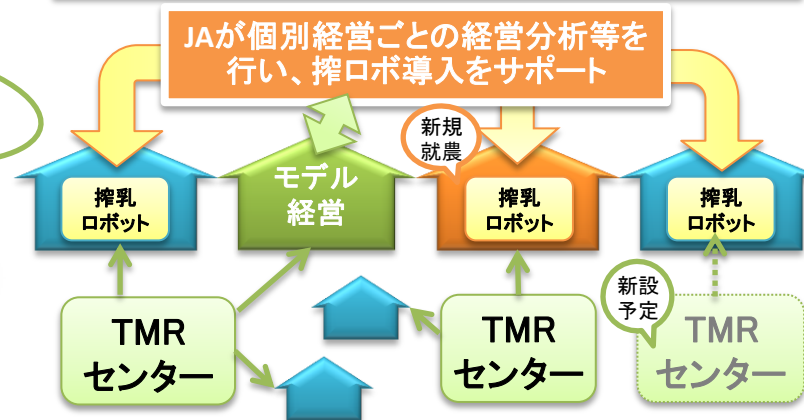
JAのサポート



H27当初事業で
 ・フリーストール牛舎新設(150頭)
 ・搾乳ロボット(2台)を導入

今後の展望

地域全体へ省力化の取組が波及



展望 搾乳ロボット・TMRセンターの普及

- JAが、モデル経営の取組を広報誌・技術研修会等で地域に発信。それぞれの中小規模家族経営の経営分析を行い、モデル経営の経営データ等も利用して搾乳ロボット導入をサポート。
- TMRセンターの利用を拡大し、地域の酪農家は飼料生産の省力化とともに高品質の飼料を確保。

課題 夫婦二人経営の限界

- 若い酪農家夫婦が、二人のみで牧場を経営し、離農農場を活用して経営規模を拡大。
- TMRセンターの利用により、飼料生産は省力化が進展。
- さらに規模拡大を進めたいが、地域では離農が進行しており、新たな担い手の確保も困難。

効果 先進的な家族経営モデルの確立

- JAのサポートで、担い手不足の中、雇用労働に頼らず、夫婦二人のみで約120頭の搾乳を行う体制を確立。

効果 収益性の向上

- 中心的経営体は省力化しながら生乳生産量を増加(出荷乳量557⇒1,340t)。